

● シリーズ 私の見た日本 Vol.223

境界とつながり

梁 杰 (リョウ ケツ)

中国広西出身。2012年広西科技大学建築学卒業。2012年～2015年FCHA建築事務所就職。2015年～2017年東京国際文化教育学院にて日本語を学ぶ。2017年大阪芸術大学大学院環境建築専攻田口雅一研究室に入る。2019年修士課程修了。帰国後、広西にある建築事務所尚合十方に入社、現在に至る。2018年第一回広西人居環境設計学年賞建築設計類金賞、2019年大阪芸術大学大学院家本英世賞、2019年中国四川省邛崃文脉巷街更新建築設計コンペに入選



私—建築—日本

2006年から2009年まで中国広西省のある大学でインテリアデザインを専攻していた頃、週末暇があれば市内最大の図書館へ建築関連の本を読みに行っていた。文章はよく理解できなくて、写真とスケッチに目を通すしかなかったので、いつもそこで建築の専門書籍を読んでいる学生さんを羨ましく思っていた。そのようななか、安藤忠雄先生の作品集に惹きつけられて、先生が設計したスケッチ、関連作品や経歴を見ているうちに、いつか自分も日本の大学で建築デザインを勉強したい、そんな強い思いに駆られて、建築の勉強を始めた。専門学校を卒業した後、編入生として広西科技大学に入学、3年間建築デザインを専攻し、その後日本への留学費用のために深センで3年間働いた。2015年に日本の土を踏み、東京で2年間日本語を勉強した後、ついに2017年に大阪芸術大学大学院に入学した。10年の間に、建築のおかげで日本とのつながりが生まれた。

境界

建築を学んでから、人の肌、建築の外壁や学校の塀など境界への意識が広がるだけでなく、留学することで、地球で一番大きな境界“国と国の境界”の存在を強く感じた。しかし、

20世紀における交通手段の革新および21世紀におけるインターネットの普及という時代に入り、国と国の境界が曖昧になっている。この境界がさらに曖昧になれば、地球はどうなるのだろうか？ 貧富の格差、様々な資源の配分、生態環境の管理などの世界的な問題がより効果的に解決できるのではないだろうか？ 数年間の在日経験は、私にとっての日本と中国との境界線を曖昧にさせた。周囲の日本人や中国人とのコミュニケーションを通じて、両国の風習やその文化をより良く理解することができた。このような経験から、紙などの「モノ」で情報を共有しながら、インターネットのような「コト」で交流することより、私は橋渡し役としてそのつながりをさらに深め、信頼し得るものにできると思う。このように2つの国の人々の間で、より友好的かつ効率的に情報共有できたり、人的交流が促進できれば、境界がもっと曖昧になるはずである。人的交流の側面であれば、昔は交通の便が良くなかったため、基本的に人々は職住近接であったが、現在は、大阪で働いている人が、奈良、京都に住んでいることもあり、毎日2～4時間の通勤時間という都市横断モデルが普通になっている。将来中国に住んで、毎日日本に出勤することもできるのではない

だろうか？ 今後、既存のスピードを越えて、安価で効率的な交通手段に更新され、国々との往來も便利になる可能性がある。

閉鎖とつながり

東京にいた時、日本語学校が蔵前駅（蔵前という地名は、江戸時代、幕府の米を貯蔵する蔵があったことに由来する）にあったので、その近くに住んでいた。放課後、いつもその周辺の面白いものを探して、歩きまわっていた。たまたま土壁で囲われた1～2階建ての建物を見かけた。美しい瓦の屋根と白い壁がある日本らしい建築で、他の伝統的な民家と違う感じがしたのだが、中国の都市にはそのような建築がなかったので、大学院修士課程入学後にやっと「蔵」だと知った。蔵の原型は弥生時代の高床式倉庫で、穀物の保存や湿気への対策として床を高くしてある。伊勢神宮は蔵の形式でつくられ、神を祀るほかに式年遷宮による建設技術の維持、保存が行われた。奈良時代の正倉院は数多くの宝物、芸術品を管理、保存する場所となり、鎌倉時代以降、蔵は「無尽銭土倉」と呼ばれる金融業、つまり富の象徴になった。江戸時代には、これが商人たちの蔵に発展し、諸藩の蔵屋敷も建てられ、大阪は「天下の台所」と呼ばれるようになった。特に中之島およ

び堂島とその周辺には、諸藩が大阪で販売するための年貢米、地元の名産品、大阪で手に入れた特産物等を保管する倉庫と、役所や邸宅を兼ねた諸藩の蔵屋敷が集中していた。儲けたお金、手に入れた特産物とともに大阪の情報を各地に持ち帰った。販売活動と役人の生活から、蔵屋敷は小さな都市として捉えることができ、大阪人と日本各地の人々の交流が積極的に展開していた。

新しいつながり：過去・現在・未来

現代都市問題の一つとして、「地域性の喪失」や「没場所性」が挙げられる。特に中国の建築設計は急激な経済発展と海外からの影響で、文化の多様性を反映した伝統的建築は現代建築に凌駕されつつある。しかし、過去の伝統建築をそのまま再現するだけでは現代生活に対応することはできない。これからの現代建築には多様性を見つめつつ、地域の伝統を反映した場所性が求められるようになってきている。

修士制作の敷地は、昔蔵屋敷があった地域、現在は大阪天神橋地域、天神祭の陸渡御と船渡御の交差点にある公園の一部である。毎年、天神祭には130万人の見物客が集まるが、近年1,000万円ほどの赤字を出し、祭りの活動は大きな影響を受けており、千年以上続いてきた「天神祭の歴史の火」が消えよ

うとしている。これは、各講社の獅子舞、傘踊り、籠踊り等の活動が、一般の人々に対して閉鎖的であることも一因にあげられよう。また、祭りで使う飾り物、たとえば提灯、当屋飾り等は専門の職人が製作したり、氏子に家に持ち帰ってつくっており、その制作技法は一般の人々にとっては、よくわからないままである。また、この地域には200軒もの乾物屋の蔵があったが、現在12軒だけしか残っておらず、その使われ方は乾物とは全く関係のない倉庫（6軒）、事務所（2軒）、雑貨屋と飲食店（4軒）となっている。このように現状、伝統文化を継承するモノやコトが失われつつある。

そこで私は、このような伝統文化に関する知識や経験、何百年何千年以上の歴史を経て現代に伝承してきたものを、これからの時代にどのように守りながら伝承していくかを考えた。大阪の歴史を踏まえ、新しい蔵屋敷の構築と展開により、マチの祭り文化と乾物屋を代表とする食文化を守り、講社や産・官・学の積極的な情報交換、交流環境をつくり、学会や大学等が連携して、伝統文化の新規性を探究する施設を計画する。また、子どもや若者に氏子の活動や当屋飾りのつくり方を教えたり、一般の人々に乾物つくりを体験してもらったり、同じ産業同士での交流を誘発し、異なる産業間での情報交換もできる施設であ

る。多様な人々の交流により、伝統文化の新しい価値が創出できると考えている。

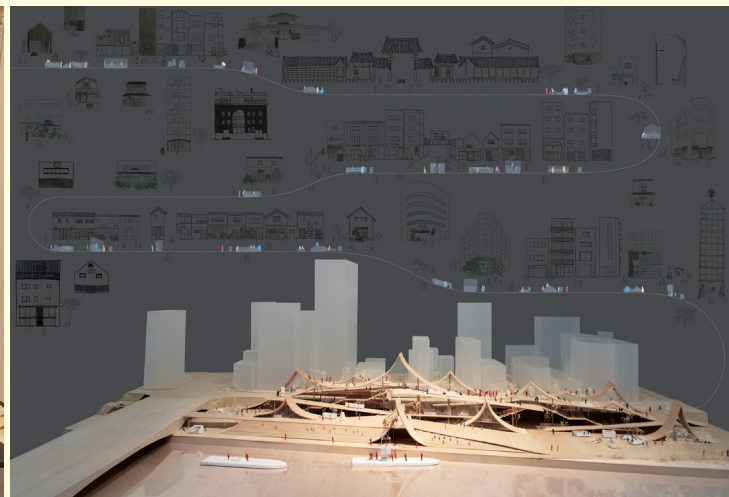
一つだけの地球の時代

2020年初め、新型コロナウイルスによる肺炎が世界的に流行し始めた。その疫病の起源については様々な説があるが、どの国が起源であっても、最終的には全人類が共通に直面する問題に発展していく。このような急速かつ猛烈な疫病は、地球上に住んでいる全人類へ直接生存の脅威をもたらすと同時に、人類にグローバル化問題への対応能力を考察させる。また、この数十年間に人類によって排出された汚染物をはじめとしたゆっくりとした環境問題は、気候変動をもたらす極端と北極に大きな影響を与え、今後数十年以内に大きな災害が発生すると予測されている。これらの問題は、日本など一部の国だけで解決することはできないが、すべての国が協力し、さらには全人類が新型コロナウイルスに対処したように、一緒に環境問題にも立ち向かわなければならない。そうすれば、人類は生存し続けることができる。

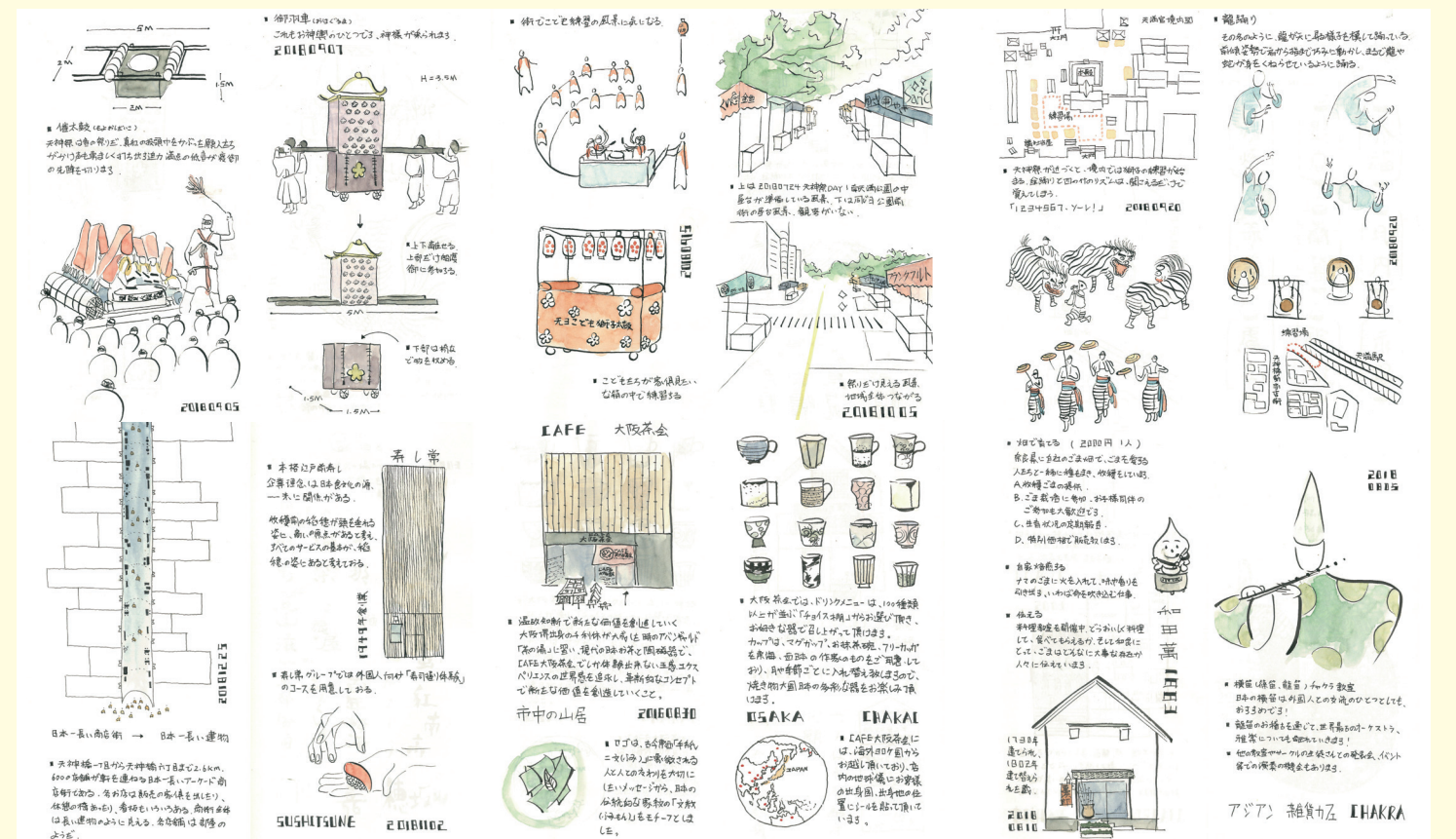
最後に、朝、日本へ出勤して同僚に笑顔で「おはようございます」と話しかけて、夜、中国の家に帰って家族にハグして「ただいま」という時代が来ることを信じている。



作品審査



修士制作作品：マチ・蔵屋敷・ケンチク（新しい蔵屋敷の構築と展開）



調査の記録